『死神の手下』な僕　接続編

アヴィス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『死神の手下』な僕　接続編

【Ｎコード】
Ｎ２３３５Ａ

【作者名】
アヴィス

【あらすじ】
今後、分岐する予定の、「バカは死んでも治らない」ということわざが、偽りではないことを証明した死神の少女と、僕『桜木直人』の半死半生の謎のストーリー。

序章（前書き）

この序章は、短編で公開されているものと同じ内容です。
短編を読んでくださった方は、第一章から読んでください。

序章

閉め切ったカーテンの隙間から、朝日が差し込みます。
今日も、いつもと同じ様に、目覚まし時計ならぬ「目覚ましラジオ」が、
調子が狂うほどの、けたたましい雑音と共に、エコーを奏でる轟音を発しました。
当然ながら、朝日でのさわやかな寝起きどころではありません。
布団で耳を覆いながら、ゆっくりとそのノイズメイカーに歩み寄ります。
「今日の天気は――――ズッザ、ザァーー――――――になるで、プツッ」
どうにかラジオが狙う『音殺』を免れた僕は、安堵の吐息を漏らします。
ボテッ・・・
あまり普通ではない音が部屋に響きました。
『それ』に気づくまでに僕は数十秒かかりました。
机の上にあった磁石が落ちたのです。
僕は、キ――――ンと言う音の超音波を感じ取っている耳をポンポンと叩きながら、
磁石に向かって手を伸ばしました。
「あ、あれ・・・」
その光景に耳を疑いました？
「えっ、な、何？何で磁石が一人でに動くの？大体なんで僕が近づいたら動き出すの？
　ねぇ・・・何で？」
そこまで言ったとき、ふとあることに気がつきました。
「ん？、何んか体がピリピリしてるよ。こ、これ、毛が・・・手に生えてる毛が逆立ってるよ。
・・・ん？、これは・・・これはもしかして『静電気』か？」

そうなのです。あのラジオが発する奇声によって、僕の体は静電気まみれになっていたのです。
ドゴオォォォン・・・

――その日、僕「桜木　直人」の家で電化製品の１つが爆破崩壊しました。――
（直人の日記より抜粋）

さて、気を取り直して朝食を食べに階段を降ります。
下には、すでに出来上がった朝食と、妹の美奈が座っていました。
「おはよー、直人！！」
中２にもなる僕が、まだ小５にもなっていない妹に呼び捨てされるのは、
はっきり言って、あまりいい気分ではありません。
「だから、よっ・・・って、お母さん居ないの？」
講義をしようと、机に向かうと、一枚の置手紙が目に入りました。
あまりにも、素っ気無く書かれた一行の文章はッ！！
――妹に手をだしちゃぁだめよ！！――
ナンデスカこの文章は！！
普通なら、「ご飯食べときなさいよ」
とか、
「勉強しなさいよ」
でしょ！！
「今日は、二人っきりだね」
机に座った妹が無邪気に言います。
そんな妹を横目で見ていた僕は、突如不思議な感覚におそわれました。
っく、なんだ？なんだこの感じは・・・
だ、だめた、体が言うことを――――
「って、・・・・えぇぇぇッ？・・・・ダ、ダレデスカ？」

幻覚なのでしょうか？
いや、今思えば幻覚のほうが数百倍よかった気がしないこともありません。
一分一秒の間に床とどうかする僕の前には、『一人の美少女』オオオォォォ――――ッッ！！
そして、目の前の少女は僕の目を見てこういいました。
「死神」
「はいいいぃぃぃィィイイイイイイイィィィ――――――――――ッッ！！」
殺人鬼や、通り魔はまだしも『シニガミ』デスカ？
ッハ！！も、もしや『お母さん』？
何？誰か死ぬの？死んじゃうの？
だ、ダメダ、電話を――――――
パニック状態に陥った僕はあわてて脳の正常な領域を作り出し、
部屋の隅にある電話に直行ッッってェェェ！！
視界の先には粉々に破砕崩壊した電話機がッ！！
「直人？、何してるの？」
ポルターガイスト現象より奇怪な現象をみて、分子崩壊していく僕を見た妹が、
何事も無かったように平常心で話しかけてきます。
「なぁ、何って、見えなひひぃいイィィィ」
『見えない何て、お前の目は節穴か？』と言う言葉を前に振り出された、
僕の身長の2倍はあると思われる『カマ』らしき物体がさえぎりました。
そして返す刀で、そばにあった電子レンジを貫切です。
さらに！！僕に向かっておもむろに言うのです。
「あなた、今日からあたしの『手下』ね」
――
――――――――――――

ってなわけで、僕の人生はもうめちゃくちゃ（になったような気がします）です。

序章（後書き）

序章を間違えて短編で出してしまいました。
ごめんなさい。
でも、本作品の方は、引き続きかいていきますので、どうぞよろしくお願いします。

第一章・第一部

僕の目の前に突如として現れた、自称『死神』の少女。その名も『フェイス』。
僕としては、『ディース』の方が良いんじゃないか、と思うんですが、そうすると本当に死神になってしまう事に気づきました。
そんな彼女は、『外見年齢１３歳程度のロリキューティーな美少女』、と言う設定にはっきり言ってオドロキです。
まぁ、『死神』と言う事なのか、いつも左手には僕の身長の２倍程もある常軌を逸した武器が握られています。
彼女はこの武器のジャンルを『カマ』と言うのですが、これは現実世界で物理的に見たら、『紅(くれない)に染まった長剣』としか言いようが無いのですが・・・
ある日、僕は思い切ってその事を聞いてみたら、『これはカマなの！！』と言われたあげく、冥界に引きずり込まれ掛けましたよ！？。
僕を生霊にでもするつもりですか！？。ホントに訳が分かりません。
そう。ホントに分からないのです。
彼女が武器を『カマ』と言い張るなら。ドラ○エで普段勇者が振り回しているのは『剣』ではなく『カマ』ですか？？。
ホントに非常事態ですよ。ランクがた落ちですよ？「勇者」さん。

これは、日常生活、仮想戦記、その他外出事故事項、などの様々な場面を生き抜いた『僕』と『彼女』の『半死半生』のストーリー。

今日は７月２０日。
今日は何の日だか分かりますか？
そうです。今日は、みんなが楽しみにしている『夏休み』の前の日にする行事が行われる日なのです。
目覚めの朝に来る『身体質量増加現象』による体のだるさを一揆に

消し飛ばした僕は、爽やかに朝日を浴びます。
そして僕は、即即とパジャマのボタンを外します。
そして、服を脱ギグハアァァァアァァァ！！
「く、くそう！！な、何だ？こ、この重圧感は・・・・・・。だ、ダメダ。立っていられない」
パジャマを脱いだ僕に襲い掛かってきたのは、重力地獄・・・・としか言いようの無いものでした。
そして、呻きながら開いた視界にそれは移ったのです。
「く、くぅ。は！！あれは！！フェイスか・・・？っっっぅぅぅぅぅぅ、分かった。取り合えず謝る。
だからやめて下さいお願いします。でないと僕が床になってしまいますよッ！！」
と、まぁ渾身の力を振り絞り彼女に言った訳ですよ。
「えぇぇ。直人、もうギブなの？はやいよぉ。だからいつまでたっても宇宙飛行士になれないんだよ！！」
「だ、ダメだよ。こんなの宇宙飛行士でも潰れちゃうよ！！大体これ何Ｇあるの？」
「ん～、標準１００Ｇ」
「えぇぇぇ、無理だ！！絶対無理だ！！・・・あぁ、聞いたとたんに重さが増したような！！」
朝から暴走半島状態の彼女を泣く泣く説得することに成功した僕は、俊足に事情聴取です。
まったく！！朝っぱらから死神に死に関連することをされては、体力どころか精神力も持ちません。
今の僕の精神力は、ゴボウのように磨り減ってる事でしょう。
行動を再開した僕は、『何か在ったの？』、などと言いそうな表情をした少女を見つめます。
「ったく。朝から何するんだよ！！あんたの名前『フェイス』でしょ？名前にちなんで僕に忠実になろうよ。そんな残虐極まりない行為ばかりしないでさ！！」

そうなのです。彼女が来てからと言うもの、こんな事は日常茶飯事なのですよ！！
おまけに、田舎に帰った両親は、１週間たっても帰ってこないし・・・
まったく。現実の出来事を『これは夢だ』と言っても言いぐらいにおかしいのです。
第一候補として挙げられる理由は、『僕にしか見えない！！』と言う事です。
そう。フェイスちゃんは、この僕を除いてその他の『生きている人』には見えないのです。
不思議すぎて物も言えなくなりますが、ちょっとだけ嬉しい事もあります。
それは、見えなければ自分の身の回りで、生死にかかわる程のポルターガイスト現象が飛び交うからです。
それに比べれば、主犯が分かっているだけマシと言うべきでしょうか。
ちょっとした嬉しさに感謝しますよ。
でも、もし神がいるのなら僕は神を脅してでも頼みたいことがありますよ。
ホント、このアホ少女を存在ごと消してください・・・と。
例え『家が液体化して、海水から塩分が消えますよ？』、と言われても、頼みます。
自分にしか見えないなんて守護霊みたいだしさぁ・・・
守護対象を殲滅ですよ？
それじゃぁ、守護霊じゃないですよ！！憑依霊ですよ！！最悪ですよ！！
あぁ～～地獄先生ぬ～～○～閣下！！助けてください！！神聖な『鬼の手』でアホ少女の『馬鹿でかい長剣』を打ち砕いてください！！
お願いします！！
回想を広げていた僕は、思考を一時中断！！

聴覚に神経を集中させます。
「なにぉ直人の癖にぃ！！たった１２４Ｇでばてるなんて、せっかくボクが見込んだ対象なのにぃ・・・！！役立たず！！」
すかさず反論します！！
「１２４Ｇ？１００Ｇ超えてるジャン！！あの時急激に感じた加圧感は、これが原因だったのか！！って、
あんた僕を何に見込んだの？『もう生きている価値は無いでしょう』と言う死の見込みですか？
子供から夢を奪うつもり？？そんなのブラックホールより恐ろしいよ！！」
「なによぉ！！手下の癖に反論するつもり！？」
死神の少女は、左手で剣の柄を握り絞めながら、迫ってきます。
だが、僕は負けません！！
ぼくは、僕は、生きる権利を証明してみせるのです！！
「手下って、大体あんたが勝手に決めたんでしょうが！！って、それよりさっきは何であんな事したのか理由を聞いていなかったような・・・」
「フェイスちゃん？！あんたさっきなんで僕にあんな事したの？」
思い出したように聞き入れた僕の行動は抜群に効果があったようです。狙っていた『誘導尋問』作戦も成功でしょうか？興奮に緊張が高まります！！
少女は、少しうつむき、しきりにキョロキョロと視線をさ迷わせます！！
勝利まであと１歩！！がんばれ『桜木　直人』！！
「フェイスちゃん？黙って無いでどうなの！！」
するとどうでしょう！！僕の言葉に反応し、死の使い魔が口を開きました・・・。
「だ・・・だって、直人が・・・直人が、朝からボクを、ボクの前で、裸いぃ・・・・・・
このアホは何を勘違いしたのか、すかさず講義します。

「ち、ちがうよ。僕はただ、制服に着替えようとしてただけだよ」
「天皇が征服？」
「ちがうよ。それは第2次世界大戦で終わったよ。僕は、学校に行くための私服に着替えてたの」
アホ少女が考える、歪曲したアイデアを消しつつ、正当な理由を述べにかかります。
「えぇぇ、直人は、自分の私腹を肥やすため学校に行くのーー？」
ダメですよ。
バカは死んでも治らない、と言うのは本当らしいです。
ため息をつき、未だに何かを呟く彼女を追い出します。
彼女は、その後も不平を並べた後、どうにか出て行ってくれました。
部屋のふすまを、バッシッ！！っと閉めます。
やっとの事で、行く準備をする事が出来ますよ。
今日からは、こう言うトラブルを想定して、制服のまま寝るのがベストでしょうか。
超過重力で伸びきったパジャマを投げ捨て、制服を着ます。
あと、余談ですけど、制服が入っているクローゼットが無駄に変形してドアが外れているんですが、これも重力の力・・・いや、死神の特殊能力なのでしょうか・・・？

ーーーーーーーーーーーーーー

つづく・・・

第一章・第一部（後書き）

第一部読んでくださった方、どうもありがとうです。
これからもじゃんじゃん書いていきますのでよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2335a/

『死神の手下』な僕　接続編

2010年10月9日02時18分発行